

里山は循環型社会の原点

養父 志乃夫 *Written by Shinobu Yabu*

里山とは、「水と空気、土、茅場^{かやば}や雑木林から納屋、家畜小屋、畑、果樹園、竹林、植林、溜池、小川、水田、土手^{あぜ}、畦、里道など一連の環境要素がつながった暮らしの場」です。この暮らしの場はヒトだけでなく多様な動植物の暮らしの場でもあり、人が育んできたといえます。その謎を解くために郊外の農家に出向き、昭和30年代までの里山の姿を古老にうかがってみました。

その里山の頂上付近は草地で、当時は屋根を葺くカヤを得る茅場であり、冬には刈り取り持ち帰ったといいます。尾根は乾燥と貧栄養な土地でも成長するマツ林で、伐採したマツ材は建築や農用材に使い、繰り返し自然発生する稚樹^{ちじゆ}で再生させてきたのです。

また、斜面の中腹以下ではコナラやクヌギ等の雑木を20～25年毎に伐採し、燃料の薪や炭を採取しました。子ども達も焚き付け用にマツや雑木の落葉を集めました。雑木の切株からは伐採毎に繰り返し新芽が萌芽し、大気中のCO₂を吸収して再生していたので、暮らしから出るCO₂も草木が吸収し、大気中の濃度を調整していたのです。農家では農耕用の牛や馬を飼い、餌の刈草を得るため土手は年1回、畦は年2～3回刈り払い、牛馬の排泄物は雑木林の落葉と混ぜて堆肥にして田畑へ戻しました。

一方、人の排泄物も下肥として田畑に還元しました。風呂の残湯や炊事の雑排水も直接は川へ流さず、すべて肥えとして田畑に循環させ、浄化した残水が川へ流れたのです。だから川水も汚れません。当時の川ではゲンジボタルをはじめ、モクズガニやテナガエビ、ウグイなど数多くの生物が生息し、一部は食材として暮らしに循環しました。かつて日本列島の里山は自然環境を完全に破壊せず、そこからの収穫

物を生活に活かし、作物や動植物がすべての「廃棄物」を再利用するシステムが定着していました。そこには昆虫の王様カブトムシや国蝶オオムラサキを多数みることもできました。

どうしてたくさんいたのでしょうか。それは、前述のように、農家では雑木林の落葉やワラなどで堆肥を作り、田畑の肥料にしていたからです。この落葉やワラなどの植物遺体がカブトムシの幼虫の主食なのです。どの農家でも堆肥を作ったので、カブトムシの親は、この幼虫の餌をめぐり産卵したことで、たくさんの子虫が育ったのです。

一方、カブトムシやオオムラサキの成虫はコナラやクヌギなど雑木の樹液を餌にします。里山ではこの雑木を伐採し、切株から新芽を萌芽させ繰り返し、燃料を生産していたので、樹皮から樹液をよく出す若い雑木がたくさん成長していたのです。

ガスや石油が普及するまで、全国で薪や炭を使っていたため、里山にはカブトムシやオオムラサキの成虫などの餌場が無数に広がっていたのです。だからこそ、子ども達が求める昆虫類がたくさん発生し、生きものとのつきあいを通して、いのちの営みを教えることができたのです。

CEL

■参考図書

養父志乃夫『里地里山文化論—上・下巻—』農山漁村文化協会（2009年）

養父 志乃夫（やぶ・しのぶ）

和歌山大学システム工学部教授。1957年大阪生まれ。1986年大阪府立大学大学院博士課程修了。東京農業大学助手、鹿児島大学農学部助教授を経て現職。主な著書は、『荒廃した里山を蘇らせる自然生態修復工学入門』、『田んぼビオトープ入門—豊かな生きものがつくる快適農村環境』、『ビオトープ再生技術入門—ビオトープ管理士のいざない』（いずれも農山漁村文化協会）など。

